

チバシティーへ

千葉といえば、曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』とウィリアム・ギブソンの『ニューロマンサー』、魑魅魍魎の妖しさとサイバーパンクな世界が混在する「チバシティー」へ、どこか昭和な近未来の雰囲気がある街並に親しみを感じていて。はじめて、千葉市美術館へいった帰り、また来たいなどおもった。元は銀行で区役所だった残り香が漂う、雰囲気のある美術館だとも思った。展覧会を観たり、旅をした帰り道、作品のイメージや出会った人たちの言葉を反芻しながら、その真実味を実感するとおもう。どこかにいって、そこから帰ってきて、話すこと。その物語の一瞬一瞬が再生されることで、空間の記憶になっていく。それが新たな居場所になるのかもしれない。ぼくにとっても、居場所が一つだけとは限らない。そのことを学芸員の山根さんに話した。

小さい頃、絵本を眺めたり、図書館や部屋で本を読んでいる子どもだった。推理小説やSF小説が好きだった。思うに、読書好きなのは、小説家志望だった父の影響があったかもしれない。教室で独り、本を読んでいると校庭で元気よく遊ばないといけなといわれた。まあ、そうなんだけれど、引っ込み思案なので友だちの輪になかなか入っていけない。思案したあげく、何かでいそがしければ言い訳がたつのではないかと、休み時間になると校庭をぐるぐる周回していた。これで完璧なはずが、余計にアイツはおかしいとおもわれていたとおもう。

そういえば、いま放送中の朝のテレビドラマの昭和時代の背景の一つとして、中世フランスの医師で占星術家、ノストラダムスの『諸世紀』を日本に紹介した本が、母方の祖母の故郷、青森の大叔父さんの部屋の本棚にもあった。近所の古本屋にもそういう不思議な世界についての本があって、お小遣いを握りしめて通ったんだけど、ファティマの聖母やホビ族の予言、宇宙考古学の古代宇宙飛行士説とかについて、子どもなりに蓋然性の高い説明や答えを探してみた。水木しげるの妖怪漫画を知ったのもその時で、『丸い輪の世界』という本を買った。加納一朗の『透明少年』という本には、いろんな調味料を混ぜると透明になれるというので、やってみた。いまでもときどき通る、寂れた商店街に昭和の遺構のような本屋が残っているけれど、木の引き戸は閉ざされ、カーテン越しに空の本棚だけがみえる。

ぼくは妖怪にも宇宙人にもまだ会ったことはないけれど、一度だけ、夏の陽射しにキラキラ反射する、銀色の球体が入道雲に隠れる一瞬を、自室の窓からみたことがあった。素敵なチラシをデザインしてくれたサイトロさんが、夕闇せまる千葉の川辺で輝く何かを目撃したように、それが未確認飛行物体、未知の何かだったのかはわからない。

「三遍回って、メタモルフォーゼ、〇〇になあれ！」と唱えれば、なりたいたいものに変身できると、母がいった。元には戻れないので、いつも2回転半ぐらいでやめていた。それから「一二の三でジャンプすると、夜空に飛べる」と、銭湯の行き帰りに話していた。なんだか、ぼくは別な星から来たような気がして、帰りたかったんだとおもう。

スズメはどこにいるか

ある日、子スズメが巢から落ちてしまったのか、路で冷たくなっていた。土に埋めてあげたけれど、台風であらわれてしまって。あんなに、つぶらな瞳をしているのに、小さな頭蓋骨に大きな眼

窩が空いていて、まるでヘルメットみたいにみえる。小林清之助の『スズメの四季』を本棚から出してきて、読みなおしてみた。スズメのいろいろな白黒写真とともに、平均2～3年で世代交代するとか、その暮らしぶりが書かれている。ネットでも検索したら、近年の調査では、都会で子育てをする環境が悪化していて、個体数を減らしていると。それで、知人の古民家にスズメがくるときいて、いったみた。皿に盛った米粒が置いてある縁側で、スズメたちがチュンチュク鳴きながら運動会をしていて、元気そうでうれしかった。家人が昼寝をしていると膝の上に乗ってきたらしい。それから、ほっそりしたのと、ぼっさりしたので分かれているらしく、スズメは体型でグループをつくっているのではないか、という話が興味深かった。千葉市動物公園にもスズメがたくさんいるときいて、いったみたかった。

美術館からの帰り、これから足繁く通う場所なのに、名残惜しく振り返っていたら、夕暮れの街路樹をめぐらにする鳥たちが一斉に集まって鳴いていて、そのシルエットを動画で撮った。でも、あれはムクドリらしい。家のさくらんぼの木には、ヒヨドリやメジロがよくくるけれど、ここ数年、家のベランダによく来ていたスズメたちをみかけていないことに気がついた。家にもスズメがまた戻ってきますようにと、パン屑やご飯粒（本当は生米がいい）と、水盤を置いている。人と人とは何によって集まっているだろうか。だれかと会う機会も減って、スズメも人間も何をみておもって、過ごしているのかを思う。

宇宙巣箱、穴居から個室へ

展示室の「宇宙巣箱」や「絵巻物マシーン」、これらの装置(device)は、車輪はあっても、自走できないけれど、移動する個室(compartment)として、自分の心を運んでくれるもの(vehicle)だ。だから、単なる部屋や道具ではなく、展示の意図を体現する存在だと考えている。子どもの工作の延長みたいなもので、いままで、設計図はひかずに、ホームセンターを歩き回りながら、つらつらと頭の中で組み立ててきた。今回は人が入る部屋ということもあり、設計図をもとに、大工の眞砂さんとアーティストの岡崎さんにつくってもらって、堅牢で安全かつ素敵な出来映えとなった。

鳥の巣も原始の穴居も出入口は一つ、円い境目はあるけれど、中にいても外がみえる。そして、鳥の巣箱は、家の形をしている。スズメの家になるのは、繁殖期の5月頃だけれど、それを高さ2mに拡大した人間の巣箱と、SF映画の金字塔であるスタンリー・キューブリックの『2001年宇宙の旅』(1968)に登場する「一人乗りの宇宙艇」の意匠を引用して、部屋の中から部屋をみる、同じ円窓からの眺めを重ね、内側と外側の境界が曖昧になってゆくことを表象した。子どもの頃に読んでいた、レフ・ニコラエヴィチ・トルストイの民話『人には多くの土地が要るか』を思い出していた。宇宙を漂流することになれば、宇宙艇が棺桶になってしまう。人一人分の穴居たる「小さな家」、宇宙を漂流する巣箱の中で、鳥はどうしているか、人もどうしているか、考えてみていた。

滞在制作と移動

修理した車で走り出す、この楽しくもどこか危うい工程、往復4時間のドライブを重ねた後半、だいぶ疲れてきて、今日も無事にこの復路を終えて、また元気で往路を走ることを願うようになった。元気を出そうと、ABBAのカセットテープを大音量で聴いたり。隣の車がクラクションを鳴らすから、何よとおもったら、車線をまたいでいたり。本当は道の駅がいいけれど、湾岸道路にはないので、コンビニの駐車場で休憩するつもりが爆睡したり。少しの緊張と高揚、朝からがんばって

夜は寝るのみ！という軽快なリズムを感じていた。然し、なぜ、気づけないでいたのか。これは千葉という国でのアーティスト・イン・レジデンスなのだから、無理に帰らないで、ホテルに宿泊すべきだった。いや、都内での仕事もあったけれど、もはや、家が宿からのような気分で走っていた。「つくりかけラボ」の5番手という好機に、SFと鳥(スズメ)を主題とした展示は、このアートプロジェクトの主旨、展覧会であり滞在制作でもある交流の可視化ができていただろうかと省みる。

制作時間の確保に誤算があったし、子どもたちや中高生とあまり話せなかったことも、かたちにできずに、つたえられなかったこともある。深夜ラジオを聴きながら、昼夜逆転の制作をしているからいけなかった。とはいえ、昼も夜もがんばったから、様々な憶いが頭の中、心の内に去来することで、忘れかけていた、見えないもの、わからないことがたくさんあることを、自室の机の引き出しの中を、のぞき込むみたいに思い出された。図らずも、作品に表象される、そういう未分化なものを引き連れてきている。

すっきりとした展示風景と裏腹に、隣の準備室の真のバックルームである、散らかった自室の様な、頭の中の混沌そのものを運んでいたとおもう。それは、新たな居場所をいつも探している、移動を手段ではなく目的とした、根拠のない確信があった。

SF、少し不思議な話

藤子不二雄のSF漫画は、SFとかいて「少し不思議」と読む。未確認飛行物体や妖精の目撃談でなくても、来場者のみなさんが少し不思議だとおもうSFな話を書いてもらい、だれかがその話を「宇宙巣箱」の中のカセットテープレコーダーに録音して再生する、展示室だけの「ラジオ放送」をしてもらった。二百話以上の素敵で不安な体験談を読んで想ったのは、空に不思議なものが飛んでいるのを、みんな、結構みているのね。そして、お互いに「ああ、あなたは、こういうことを不思議とおもうのね」と、不思議と不思議でないの境目がだんだん曖昧になってゆくを感じていた。

H・G・ウェルズの『タイム・マシン』で時間旅行者は云う「私たちが時間の中をうろつきまわれないというのはおかしい。たとえば、私があるできごとを非常にありありと思い浮かべている時は、私はそれが起こった瞬間に立ち戻っている。何か心奪われた状態になるわけですね。ほんの一瞬、そこへひょいともどるのです。もちろん、時間をあともどりしてそこへずっととどまっていることはできません」と。

まさしく、臉を綴じて、滞在先の町並みや友人の表情をありありと思い浮かべる時、あの日あの場所に立っている気がする。

自分が目の当たりにしたことを、直接だれかに伝えることはむずかしいけれど、自分の話をだれかが伝えてくれたら、ラジオのDJがリスナーからの葉書を読むように、「宇宙巣箱のSFラジオ局」でだれかの話をきいた、だれかの真実味になるかもしれない。もう会えないかもしれないけれど、千葉での一期一会は、お互いの人生のこれからの物語を想像しながら、きっとどこかで無関係ではないと、だれかと自分の物語として代読しようとしていたのだとおもう。

とりがうたう、ひみつとはなにか

ある日、展示室で「もしかして、恵比寿映像祭に出品されていませんか」ときかれた。「宇宙巣

箱」をみて、映像祭の「黒い汽車」と同じ感じがした。「え、そうです！」と答えながら、ぼく自身も、「黒い汽車」と「宇宙巣箱」をつくった人が、同じなのかどうか考えていた。何かが続いていることに気づかされた。ずっと前に、ライブをみてくださっていた方も来てくれて、ぼくが「いつか、宇宙船に乗って船出したい！」と叫んでいたらしく、「松本さんの中でちゃんと続いていたんだなおもうと、うれしかった」と話してくれた。すっかり忘れていたけれど、小さな舟で大海へ漕ぎ出すような気持ちは、いまも忘れてはいない。

少し不思議な話の中に「この展示室で人が交流することを、鳥が集まるようにしたかったのかもね」と手紙のように書かれていた。「ここに偶々来てみたのだけれど、全然違うのに、私の知っている懐かしい場所を思い出す」という人や「自分の部屋が無機質で好きになれなくて、友人宅を泊まり歩いている」と話してくれた人もいた。数ヶ月のあいだ、この妙な展覧会の、この展示室が、だれかとだれかにとっての新しい場所となった瞬間もあったと信じたい。

「聞き耳頭巾」という昔話がすきで、粗末な頭巾を被ると、ズメたちの話がわかるようになる。知らないことがあることを知って、それをどう活かしていくのかが面白い。こうやって、目の当たりにしたことが、間接的かつ不明な経路でだれかに伝わる、未知の関係性があると想像する。長年の研究の末、四十雀の鳴き声に文法があることを解明した、京都のスゴい先生がいるというニュースを行き帰りのラジオで聞いた。日常の中に、そういうものがあると信じつづけることに「秘密」がある。

だから、いろんな人の横顔とその人からもらった言葉の、その表情を覚えていたい。オーバーでセルフ・サティスファクションな心にかくしてきたことを伝えられなかった。もう、伝わらないかもしれないということも自覚するけれど、蒼い空が紫から薄桃色に変わるのを独り見上げているような夜の静寂に、一瞬の永遠を感じる。いったことがある場所も、まだ見知らぬ場所も、どこかでつながっている。そして、時間の後先も、ほんとうはないかもしれない。「つくりかけラボ05」は終わったけれど、自分が意図したことを、展示室での対話と意見交換を反芻して、考えつづける。今日おもしろいと感じたこと、すてきな気持ちを明日にもっていけるだろうか。

「SF とりはうたう ひみつを」にご来場いただいたみなさん、山根さん、田口さん、美術館のみなさん、VOQさん、市川さん、岡崎さん、真砂さん、ほんとうにありがとう。

松本力

※このテキストは、『「つくりかけラボ05 松本力 | とりはうたう ひみつを」報告書』（2022年3月 発行・千葉市美術館）p.6に掲載された寄稿文（抜粋）の全文です。